

不登校児童への援助のあり方

— 学級担任の役割を通して —

糸満市立西崎小学校教諭能登美登子
指導講師具志頭村教育委員会指導主事玉寄幸子

内容要約

神経症的登校拒否を中心に、不登校の理解、学校・家庭・関係機関との連携のあり方、効果的に関わるための具体的な援助のあり方を研究した。また、不登校児童を温かく迎えるための学級づくり、不登校を出さない学級づくりのため、より良い人間関係をつくることのできる構成グループエンカウンターを実践した。その結果、学級の支持的・受容的雰囲気が生まれてきた。

【キーワード】 不登校、人間関係、構成的グループエンカウンター

目 次

I テーマ設定の理由.....	41
II 研究仮説.....	41
III 研究の全体構想図.....	42
IV 研究内容.....	42
1 不登校の理解.....	42
2 学校・家庭・関係機関との連携.....	43
3 時期・状態に応じた対応の仕方.....	44
4 構成的グループエンカウンターについて.....	45
V 実践事例.....	46
1 事例研究.....	46
2 構成的グループエンカウンターの実践.....	47
VI 研究の成果と課題.....	50
1 成果.....	50
2 課題.....	50

不登校児童への援助のあり方

— 学級担任の役割を通して —

糸満市立西崎小学校教諭 能 登 美登子

I テーマ設定の理由

文部省の平成11年度の「学校基本調査」によると、30日以上欠席した不登校の小・中学校の児童生徒は、小学校26,014人（本県405人）、中学校101,680人（本県1,535人）で、いずれも過去最高の数字を示した。このような著しい増加とともに、不登校問題にどのように対応すべきかに強い関心が向けられている。

これまで、巡回教育相談員による相談、学校現場へのスクールカウンセラー・心の教室相談員の配置、適応指導教室の充実など様々な対応策を立てて実施してきている。しかし、不登校は、学校・家庭・社会など様々な要因が複雑に絡み合い、多様化・長期化してきており、効果的な対応が難しい状況にあり、社会的に深刻な問題となっている。

私は、昨年6年生を担当し、不登校児童A子と出会いその対応に苦慮してきた。A子は、5年生に上がる年に母、兄の3人で他県から引っ越してきた。2年生の頃から欠席が30日以上あり、5年生では1学期30数日出ただけで、2学期からは全く登校しなくなった。6年生になって初めての家庭訪問で、本人に学校へ行きたいという気持ちがあることを知り、1年生を迎える会をきっかけに登校を促すと、その日から登校するようになった。ところが、学習の遅れや学級に親しい友人がいないことなどから、再び登校しなくなった。なんとか登校させようと、家庭訪問や電話連絡、児童同士の接触を多くもたせるなど試行錯誤しながら働きかけたが、効果的な方法を見出せないまま、1年間が過ぎてしまった。

1年間のA子に対する関わり方を振り返ってみたとき、

- 登校してきたA子を温かく迎え入れる学級の雰囲気づくりが十分できていなかった。
- 不登校に対する理解が不十分で、登校させることだけに目が向いてしまい、本人や母親と信頼関係を築くことをあまり重視していなかった。
- 問題を一人だけで抱え込んでしまい、学校、家庭、関係機関への働きかけが弱かった。

などの反省点が挙げられる。このように、対応が適切でなかったため不登校をこじらせ、さらに長期化させる結果となってしまった。

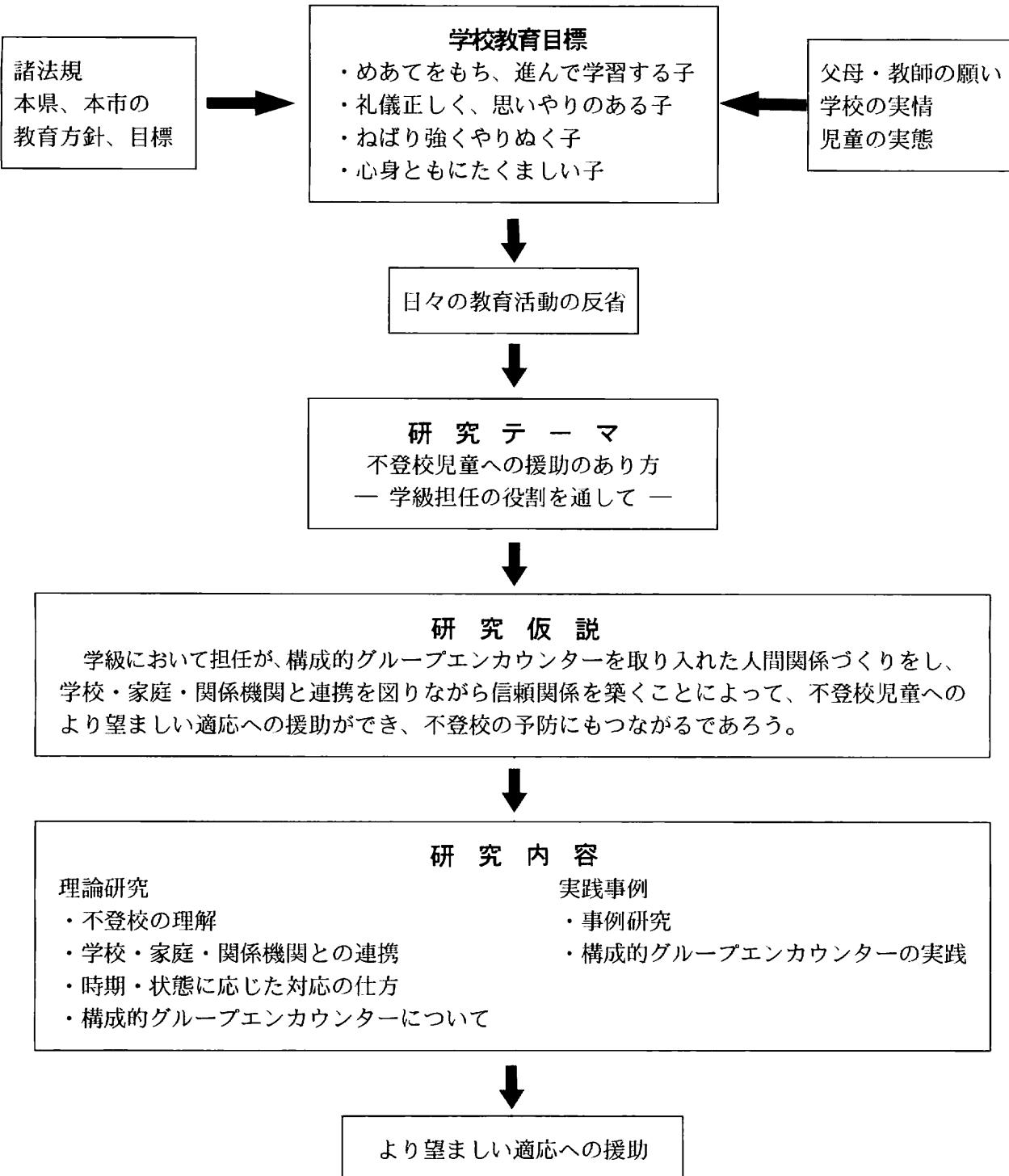
不登校児童に適切に対応していくためには、学級担任が、不登校に対する理解を十分に深め、児童の内面を理解し、信頼関係を築いていかなければならない。また、一人だけで抱え込まずに、学校・家庭・関係機関と連携を密にし協力し合えば、より良い解決への道が見出せると考える。さらに、不登校児童が安心して学校に戻ることができるよう、学級の人間関係をより良いものにしていかなければならない。そうすることが、不登校そのものの予防にもつながっていくのではないだろうか。

そこで、①神経症的登校拒否を中心とした不登校に対する理解 ②不登校児童の状態に応じた適切な対応の仕方 ③学校・家庭・関係機関との連携のあり方 ④構成的グループエンカウンターを取り入れた人間関係づくりについて研究することにより、不登校児童へのより望ましい適応への援助のあり方を探ろうと思い本テーマを設定した。

II 研究仮説

学級において担任が、構成的グループエンカウンターを取り入れた人間関係づくりをし、学校・家庭・関係機関と連携を図りながら信頼関係を築くことによって、不登校児童へのより望ましい適応への援助ができる、不登校の予防にもつながるであろう。

III 研究の全体構想図



IV 研究内容

1 不登校の理解

(1) 不登校の考え方

文部省は、不登校とは「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にあること（ただし、病気や経済的な理由によるものをのぞく）をいう」と定義している。

また、不登校を「特定の子どもの特有の問題があることによって起こる」という従来の固定的な観念でとらえるのではなく、様々な要因が作用すれば「どの子にも起こりうるものである」という観点でとらえて、指導・援助することが必要であるとしている。

(2) 不登校のタイプ

不登校になるきっかけは、様々なものがあるが、タイプ別に分けることによってそれぞれの特徴や違いが明らかにされ、適切な援助の仕方の目安をもつことができる。しかし、これらのタイプを特定の対応方法に限ると一方的に決めてしまうと、実際の児童の姿を正しく捉えられない場合がある。タイプ分けを一つの手がかりとして、それぞれの児童を実態に応じて理解し、関わりを深めるよう心がけることが大切である。

文部省は、不登校のタイプとして「学校生活に起因する型」「遊び・非行型」「無気力型」「不安など情緒的混乱の型」「意図的な拒否の型」「複合型」「その他」の7つに区分している。

平成11年度の「学校基本調査」によると、不登校児童生徒のうち、本県の小学校では3人に1人が「不安など情緒的混乱の型」となっており、A子の場合もこのタイプに該当する。これは、神経症的登校拒否ともいわれているが、小泉はそれを次の3つのタイプに分類している。

神経症的登校拒否の分類

分離不安型	<ul style="list-style-type: none">・幼児や小学校低学年を中心に多く見られる型で、母親からの物理的な分離が困難なため起こる登校拒否。・親が過保護・過干渉のあまり、子どもの自主性・自発性が育っていないため生じたもの、または、拒否に対する抵抗としての分離不安もある。
優等生の息切れ型	<ul style="list-style-type: none">・中学生、高校生の時期に出てくる型で、学業成績の低下とかクラブの活動実績がふるわなかったとか、子どもの自尊心が傷つけられたときに急性に発現することが多い。・親の価値観に過度に同一化しているため思春期における自我の再構築が困難になり、不安と焦りが高まる。・生真面目で神経質、完全主義的な傾向が強い。・不登校に対する罪悪感、苦悩が強いて学校に関することにふれられることを極端に嫌い、登校を強制すると暴れたり、人に会うのを避け、とじこもりがひどくなる場合が多い。
甘やかされ型	<ul style="list-style-type: none">・小学校の頃から何度も断続的な不登校状態を繰り返し、中学校、高等学校へと至っている。発症前は自己中心的で、社会性が未熟、依存的、覇気がない忍耐力も足りないなどの性格傾向が見られる。・自立心や自発的な対応が要求され努力が必要な状況に直面すると、強い不安や欲求不満を招きそれに耐えられず家庭へ逃避する。

2 学校・家庭・関係機関との連携

不登校問題に取り組むとき、学級担任一人では限界があり、多面的に対応策を立てることが難しく、問題が長期化し、ますます事態が深刻化する場合がある。

そこで、学校・家庭・関係機関との連携が必要になってくる。(図1)

(1) 校内での連携

不登校児童に対応していくためには、校内の全教師が、問題を共有化し、密接な連携を保ちながらみんなで支えていける体制づくりが望まれる。

具体的な方法としては

- ① 学年の協力体制を整え、学年の全ての教師が全ての児童を見守る態度で対応する。
- ② 職員朝会・学年会・生徒指導委員会等を活用して、積極的に情報交換する。
- ③ 校内研修で、講師を招いての全体研修会や事例研究会を行い、共通理解や資質向上に努める。
- ④ 児童がどの教師にも相談できる学校全体の雰囲気づくりをする。

(2) 家庭との連携

不登校児童に対応していく時、家庭とどの程度協力していけるかが重要なポイントである。特に、長く欠席が続き、本人になかなか会えないときは、保護者からの情報が大変貴重になってくる。したがって、保護者が本人の様子を率直に語ってくれるような信頼関係を築くことが大切である。家庭と

担任との連携がうまくとれるようになれば児童の心理的負担は軽くなり、より良い方向への変容が期待できると考える。

保護者と信頼関係を築くためには

- ① 保護者は子どもも同様強い不安を抱いているので、気持ちを十分に受け入れ、対等の立場で、共に悩み、共に歩むという気持ちで接する。
- ② 指導しようとか、適切なアドバイスをしようとか身構えないで、何が言いたいのか、どんな気持ちでいるかを感じ、理解しようと心がける。
- ③ 保護者が安定した気持ちで子どもに関わられるよう支持し、支援する。
- ④ 互いにそれぞれの役割を理解しながら、協力体制を組む。
- ⑤ 保護者から得た個人的な情報は、絶対漏らさない。どうしても伝える必要があるときは、本人の了解を得る。
- ⑥ 学級内の情報を、学級通信などを通じて保護者に知らせる。
- ⑦ 家庭と気軽に交流できる連絡帳などを活用する。

(3) 関係機関との連携

不登校が長期化し、不安などの情緒混乱が強く見られ、いろいろ努力しても好ましい方向に向かわないときは、担任一人で抱え込まないで、関係機関と連携することが効果的である。

関係機関を利用する際の留意点を次のようにまとめた。

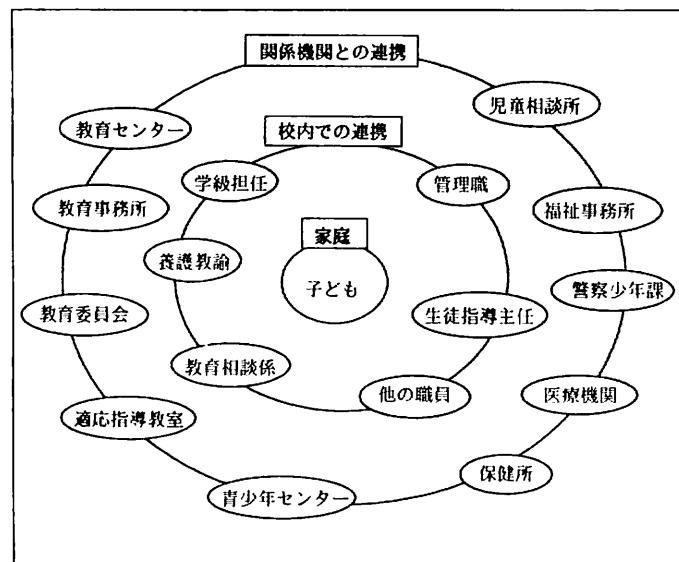
- ① 保護者との信頼関係ができていないのに関係機関を勧めた場合、「担任から見捨てられた」と受け止められる場合があるので、信頼関係を築いてから勧めるようにする。
- ② 保護者の不安な気持ちを十分に受け止めながら、適切な時期を捉え、根気強く説得に努める。
- ③ 保護者が抵抗を感じないで利用できるような関係機関を選ぶ。
- ④ 関係機関に任せたままにせず、担任や保護者がそれぞれの役割を自覚したうえで、関係機関の担当者を中心に、協力体制を築く。
- ⑤ 日頃から、関係機関と積極的に連携を図り、いつでも気軽に援助が受けられるようにしておく。
- ⑥ 利用できる各機関の情報収集を行い、施設見学に行くなどして、理解を深めておく。

3 時期・状態に応じた対応の仕方

不登校の時期・状態に応じた適切な対応ができるよう、具体的な現れ方の推移と対応の仕方を、牧昌見、甲斐志郎の「進行・回復過程表」を参考にまとめてみた。（神経症的登校拒否の例）

時期	状 態	教師・親の対応
進 行 期	<ul style="list-style-type: none"> ・朝、ちょっとしたことでぐずるようになる。 ・頭痛・腹痛・微熱・吐き気などの身体的症状を訴えるようになる。 ・休日には元気で過ごしているが、休みあけに登校をしぶるようになる。 ・登校しない理由を給食がいや、友達がいじめる、先生が嫌いなどと言うことが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童とのつながりを深めるため、できるだけ声をかけ小さなことでも認めて励ますようにする。 ・原因を探し、分かれば、それを取り除く努力をする。 ・親が学校へ押し出すとか、教師が迎えに行くなどの軽い登校刺激を与えてみる。 ・下校時に友達2、3人を立ち寄らせる。 ・親は、本人を責めないで受け入れるようにする。
	<ul style="list-style-type: none"> ・朝起こうとすると、ひどく抵抗して泣き叫ぶことがある。 ・朝、友達が誘いに来ても出て来なくなる。 ・朝、トイレから出て来なくなったり、中か 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭における本人の様子を親に観察してもらい情報を得る。その情報から登校刺激を控えるか軽く与えてみるか判断する。 ・教師は、親の気持ちが安心できるように、話を聞くよ

図1 学校・家庭・関係機関との連携



の 段 階	期	ら鍵をかけてしまうようになるが多い。 • 暴言を吐いて親に反抗するようになる。 • 宿題などが届いてもやらない。教科書も見なくなる。	うにする。親の養育態度を責めるような、発言は慎む。 • 勉強の強要はやめる。 • 友達の朝の誘いはやめさせる。 • 相談機関の利用を親に勧める。
	後	• 頭痛・腹痛などの症状が一段とひどくなる。 • 友達や先生に会わなくなる。 • 学校や勉強のことを言うと、ひどく不機嫌になり、反抗するようになる。 • 一日中テレビやマンガなどを見たりして、生活のリズムが乱れる。 • 無理に登校させようとすると、筋肉の硬直が起きて動けなくなることがある。 • 家族と一緒に食事をしなくなる。 • 電話には全く出なくなる。	• いっさいの登校刺激をやめる。 • 勉強についての催促はやめる。 • 教師は、親が心配している気持ちを理解するように心がける。 • 本人に対しては、安心して休むように話す。 • 本人に会えなくても電話で様子を尋ねたり、玄関先での訪問をしたりして、関係を絶やさないようにする。 • 親は、本人の思い通りにさせるようにする。
回 復 の 段	初 期	• 部屋に閉じこもって過ごすが、何か好きなことを始め出す。 • 家族と一緒に食事をするようになる。 • 相手によっては電話に出ることもある。 • 親が学校のことに触れなければ、家族と話し合えるようになる。	• 登校刺激はまだ与えない。 • 好きなことに没頭させる。 • 家庭の生活リズムにのせるようにする。 • 親との連絡を密にして本人の動きを把握するとともに親に安心してもらえるような関係を築く。 • 気にかけていることを手紙などで知らせる。
	中 期	• 家の中では、友達と遊べるようになり、電話にも出られるようになる。 • 表情が明るくなり、行動がやや活発になる。 • 家族となら外出できるようになる。 • 先生が、休日または放課後に訪問すると会えるようになる。 • 学校の話をしても、あまり緊張した表情をしなくなる。 • 家庭の生活リズムにのれるようになり家事の手伝いをするようになる。	• 教師は、家庭訪問を始め、学校の様子を伝えたり、興味や関心を理解するなど児童とのラポールをつくるようする。(訪問は午後の方がよい) • 友達を数人遊びにやる。 • 親は、子どもに家事の手伝いをさせるようにする。
階	後	• 自分から先生や友達に電話をかけることができるようになる。 • 友達と外で遊べるようになり、学校の様子を自分から聞くようになる。 • 勉強をやり始めるようになる。 • 家にいてもつまらないような事をもらうようになる。 • 遠足、キャンプ、誕生日会等には参加できるようになる。 • 保健室ならいけるようになる。	• 友達が遊びに行ったときは、外で遊ぶようする。 • 父親は、子どもとの関係を深くするように心がける。 • 宿題・その他のプリントを届けるようにする。 • 子どもがやれることには手を貸さないようする。 • 学級での受け入れ態勢をしっかりしておく。 • 学校行事の時に迎えに行ってみる。 • 本人に意欲があれば別室登校を勧める。 • 登校しても特別扱いはせず、「明日も待っているよ」などの言葉かけは慎む。 • さりげない中でのあたたかな配慮を心がける。

4 構成的グループエンカウンターについて

学級担任は、不登校児童がいつでも安心して学級に戻れるように、温かく迎えられる学級づくりをしていかなければならない。また「不登校はどの子にも起こり得るものである」という視点に立って、予防にも力を入れる必要がある。そのためには、学級が、友達から受け入れられ、生き生きと活動できる心の居場所となるように、より良い人間関係を築いていかなければいけない。その教育技法の一つに、構成的グループエンカウンターがある。

(1) 構成的グループエンカウンターとは

自己理解、他者理解、自己受容、信頼体験、感受性の促進、自己主張のねらいをもった演習（エクササイズ）を通して、人間関係を円滑にすることを目的とする体験学習である。その体験を通して、自己や他者への理解を深め、ふれあいのある人間関係の作り方、維持の仕方、修復の仕方を学ぶことにより、行動の変容と人間的な自己成長が図られる。

(2) 構成的グループエンカウンターの特長

- ① 短時間でリレーション（人間関係）を深めることができる。
- ② ゲーム感覚で行えるので、学校教育の場に取り入れやすい。
- ③ 教師としてのリーダー性があれば、誰でも実施できる。
- ④ 時間に応じてプログラムを伸ばしたり縮めたりできる。
- ⑤ 子どもたちの実態に合わせてエクササイズを選ぶことができる。

(3) 実施上の留意点

- ① エクササイズのねらい、内容、ルールを説明するときは、短く、わかりやすくする。
- ② 発達段階や児童の実態にあったエクササイズを選ぶ。
- ③ リーダーの力量にあったエクササイズを選ぶ。
- ④ エクササイズをしたがらない子には強制しない。
- ⑤ ルールをきちんと守らせる。
- ⑥ 児童の様子や振り返りカードなどから、ダメージの確認をし、ケアを忘れない。

V 実践事例

1 事例研究

A子との関わりを振り返って、効果的な対応の仕方を考えてみたい。

(1) 問題の概要

A子は2年生の頃から30日以上の欠席があり、3年(48日)、4年(131日)、5年(186日)と増えてきている。沖縄で子どもを伸び伸びと育てたいという母親の希望で、5年生に進級する年、他県より母、兄(高校生)、A子の3人で引っ越してきた。父親は仕事の関係上、たまに会いに来る状況である。

5年生の時は、1学期に30数日登校しただけで、その後登校していない。教育相談員と話し合い、適応指導教室に通うことを勧められたが、気持ちの行き違いから拒否している状況にある。

(2) 指導の経過と考察

① 本人との関わり

- ・ 初めての面談で、A子が「学校へ行きたい」と話していることを知り、1年生を迎える会への参加を促した。それをきっかけに登校するようになったが、連休明け、再び登校しなくなった。

A子は、自分から「学校へ行きたい」と言い出しているので、再登校へのいい機会だったと思う。しかし、いきなりスタートから普通登校にしたことは、長期間休んでいたA子にとっては、かなりの負担があったのではないか。A子の1年生を迎える会の感想や日記からも、無理している様子が感じられた。

放課後、教室に遊びに来させる、保健室登校を認めるなど時間的・場所的に段階をおいた部分登校について、本人の気持ちを聞きながら慎重に進めていく必要があった。

- ・ 登校しなくなつてからは、定期的に家庭訪問や電話連絡をしたり、取り組めそうな教材や図書室の本などを届けたりした。しかし、登校させようと焦って、行事への誘いなど、過度な登校刺激を与えすぎたようだ。特に、修学旅行の話し合いに参加させたことは、寝言で「修学旅行には行きたくない」と言うほど拒否反応を示し、かえって逆効果になってしまった。

登校刺激は、やり方によって、有効にも逆効果にもなることが分かった。的確で、効果的な登校刺激を与えるタイミングをつくっていくためには、常にその子の状態を把握していくなければならない。せき立てず、ゆっくり見守る姿勢が大切であった。A子の趣味を中心とした楽しい会話をしたり、公園で一緒に遊んだり、交換ノートをするなど、もっと心の交流を図り、信頼関係を築くことが大切であった。

- ・ 母親との面談から、A子が、算数の宿題が分からないが、やっていかなければという気持ちが強く、ストレスを感じていることが分かった。学校でも、算数の時間では大分苦労しており、机間巡回をしながら指導したり、隣りの子に、教えてあげるよう声かけをしたりした。学習の遅れに対する不安を取り除いてあげるためにも、本人の負担にならない程度に補習を行う必要があつ

た。

② 家庭との連携

- ・ 家庭訪問や電話連絡で、母親と話す時間は多くもつことができた。A子が家の手伝いをしたり、ドリル学習をしたりして頑張っていることや、兄の、学校での様子、自分自身の体調があまりすぐれないことなども話してくれた。しかし、具体的な対策についてのアドバイスや話し合いはできなかった。

私からの一方的な連絡だけで、母親からの連絡がなかったのは、「この先生なら、どんな悩みでも打ち明けられる、ちゃんと聞いてくれる」という信頼関係が、まだできていなかったからであろう。

母親は、A子のことで悩みながらも、家の仕事を任せたり、閉じこもりがちにならないように、図書館に連れ出したりといろいろ努力している。このような母親の頑張りを、励まし、認めてあげる言葉かけや共に考えるという気持ちを伝え、信頼関係を深めることが大切であった。

- ・ A子は、5月の連休に父親が来ることを楽しみにしていたが、仕事の都合で、ゆっくりしてもらえなかったことに不満を漏らしていた。しかし、夏休み、冬休みは、父親とのんびり過ごせたことで、休み明けにかけた電話の声も明るく、年賀状のお礼の便りにも楽しかったことが書かれていた。

このように、父親との関わりは、A子の気持ちに大きな変化をもたらしたことがわかる。父親に、A子との触れ合いを多くもってもらうよう、働きかけることも必要であった。

③ 校内での連携

- ・ 校長・教頭・学年の先生や養護教諭にA子の状況を話し、いろいろ悩みを聞いてもらったが、単なる報告だけに終わってしまった。もう少し、具体的にどんなことをしてもらいたいのかはっきり伝え、協力を得る必要があった。
- ・ 不登校になってからの転校で、前籍校での情報が不足していることも指導を困難にした。前籍校や前年度の担任との引き継ぎの重要性を感じた。

④ 関係機関との連携

- ・ 適応指導教室に通うことを勧めたが、前年度のこともあり、なかなか受け入れてもらえなかっただ。そのため、他の機関を勧めるチャンスを逃してしまった。母親に勧める前に、関係機関について詳しく調べたり、連絡を取ったりして、親を説得できるだけの準備をする必要があった。

また、私自身が、担任としてA子にどのように関わっていけばいいのか、相談することも必要であった。

⑤ 学級との関わり

- ・ 学級の中には、A子の欠席を「ただの怠けじゃないの」と思っている児童がいたので、「怠けて休んでいるのではないこと、学校に来たいと思っているが来れないこと」等を話し、どんな学級だったら学校へ来るのが楽しくなるのか考えさせた。しかし、A子のことを取り上げて話すことが多くなると、「またか」という気持ちを持たせてしまうこともある。

取り立てて、A子のことを話題にしなくても、日頃から、担任が、学級の児童一人ひとりを大切にする指導を心がけることにより、お互いを認め合える雰囲気づくりができ、A子の気持ちが、理解できたのではないだろうか。

- ・ 朝、時々迎えに行ったり、放課後、遊びに行ったり、運動会前は、一緒にエイサーの練習をしたりなど、気にかけてくれる児童も出てきた。できるだけ、A子の負担にならない程度にと協力してもらった。また、学校からの連絡物や手紙なども届けてもらい、関係を絶やさないようにした。

2 構成的グループエンカウンターの実践

(1) 児童の実態調査

① 目的

児童の集団への適応度の実態を把握し、学級のより良い人間関係づくりの援助に役立てるため、

学級の児童全員を対象に「児童理解カードPOEM」と「楽しい学級生活を送るためのアンケートQ-U」を実施した。

② 結果と考察

「POEM」は、児童の心の問題や行動上のつまずきを早期に発見したり、行動が現れる以前に予測するための検査である。

検査の結果から、不適応児童が8人、過剰適応児童が2人、不確定児童が1人いることが分かった。また、不適応児童のうち3人は不登校傾向があるという結果が出た。

「Q-U」は、児童の学校生活での満足感や充実感を次の4つのタイプで把握し、不登校の予防に活用することができるアンケートである。

- ・学級生活満足群（学級に自分の居場所をもち、価値を認められていると思っている児童。）
- ・非承認群（学級で認められることが少なく、自主的に活動しようという意欲が乏しい児童。）
- ・侵害行為認知群（学級でいじめや悪ふざけを受けているか、他の児童とトラブルがある可能性が高い児童。）
- ・学級生活不満足群（学級に自分の居場所がなく、いじめや悪ふざけを受けている可能性が高く、また、友達から認められる機会がきわめて少ない児童。）

Q-Uの結果から、学級生活満足群は12%で、約9割の児童が学級生活に満足していないことが分かった。中でも、友達から認められるという承認得点が極端に低かった。

そこで、他者を受け入れ、支持的・受容的な学級の雰囲気づくりをするため、お互いの良さを認め合う体験のできるエクササイズを多く取り入れた構成的グループエンカウンターを実践した。

(2) 授業実践

小学校2年生の1学級を対象に、1月間で、学級活動の時間3回、体育の時間1回、帰りの会で2回の合計6回実践した。

① 指導目標

エクササイズを行うことにより、自己理解や他者理解を促し、信頼感や自尊感情を高め、温かな人間関係を作り、不登校を予防する。

② 指導計画（省略）

構成的グループエンカウンターは、指導計画に従って6回実践した。次に6回目の「いいとこさがし」の指導案を示す。

③ エクササイズ名 「いいとこさがし」（自己理解）

④ ねらい

- ・友達のよさを見つけてほめることにより、支持的・受容的な学級の雰囲気をつくる。
- ・友達が見つけた自分のよさを知り、受け入れられることの喜びを味わう。

⑤ 準備 いいとこカード（資料1） シール 筆記用具 ストップウォッチ

⑥ 展開

場面	指導内容	教師の支援及び留意点
ウォーミングアップ	<p>＜グー・チョキ・パーじゃんけん＞</p> <ul style="list-style-type: none">・グループでハンカチを1枚用意し、机の真ん中に置く。・教師が「グリコ」と言ったら、大きな声で「グー」と言い、手をこぶしにして上げる。「チョコレート」は「チョキ」と言って、手をチョキにして上げる。「バイナップル」の場合は、真ん中のハンカチをすばやく取る。	<ul style="list-style-type: none">・はじめ、手は膝の上に置くようにする。・「グリコ」・「チョコレート」・「バイナップル」をランダムに言う。・元気に声を出して手を上げている子を見つけてしっかりほめてあげる。
インストラクション エクササイズ	<p>＜いいとこさがし＞</p> <ul style="list-style-type: none">・エクササイズの説明をする。・カードに名前を書き、集めてとなりのグループに渡す。	<ul style="list-style-type: none">・はっきり、わかりやすく伝える。

	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで友達のいいところを探してカードに書き込む。（1人につき2分） ・カードを集めて本人のいないグループに渡し、カードにつけたしをする。 ・カードを本人に返す。 ・自分のカードを読む。 ・友達のいいところを読み、自分もそうだと思ったらシールを貼っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ一人ひとりのよさのヒントを用意しておき、書けない子にアドバイスする。 ・少ししか書かれていないカードには特にはりきって探すよう声かけをする。 ・混んでいないところから先に回るようにさせる。
シェアリング	<ul style="list-style-type: none"> ・自分や友達のいいとこさがしをして感じたことを発表する。 ・教師が児童の活動から感じたことや気づいたことを話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表できないときは、具体的な質問をし、発表しやすくする。

(「エンカウンターで学級が変わる」国分康孝を参考に作成)

(3) 指導実践の考察

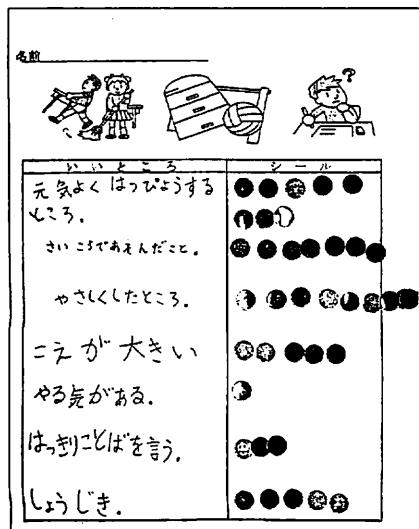
① 成果と課題

- ・児童の感想にもあるように、人から認めてほめてもらえることは、児童にとってうれしいことであり、次への意欲につながっていっている。さらに、友達のことを認めてあげたいという気持ちが生まれてきている。
- ・「ありがとうカード」や「いいとこさがし」は、これからも続けていきたいという声が出て、学級の支持的・受容的雰囲気が生まれつつある。
- ・毎回、振り返りカード（資料2）を書かせることにより、シェアリング（ふりかえり）では語れなかった児童の気持ちも知ることができ、その後の指導に役立てることができた。
- ・低学年の児童は競争心が強いため、勝ち負けだけにこだわって、ねらいが達成できないときがある。インストラクションでの、ねらいの確認のしかたを考えたい。
- ・「楽しかった」「もっとやりたい」だけで終わることのないように、シェアリングする力を育てる工夫が必要である。

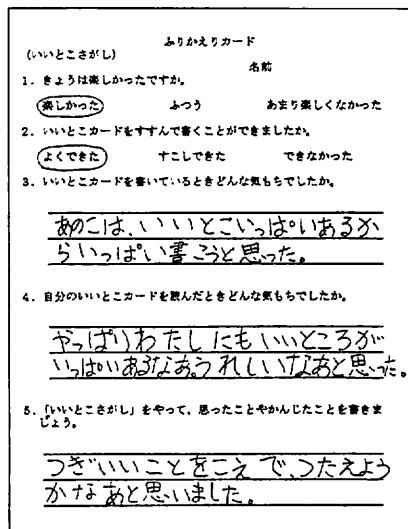
児童の感想

- ・ありがとうカード（資料3）をもらったら、もっと書きたくなった。
- ・家に帰りたくないぐらいうれしかった。ずっとやっていたい。
- ・自分や友達の心を優しくするための授業だと思った。
- ・給食を全部食べているにシールがたくさん貼られていたのでうれしかった。これからも残さず食べたいです。

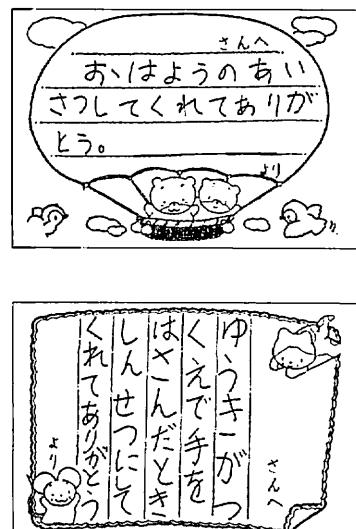
資料1 いいとこカード



資料2 ふりかえりカード



資料3 ありがとうカード



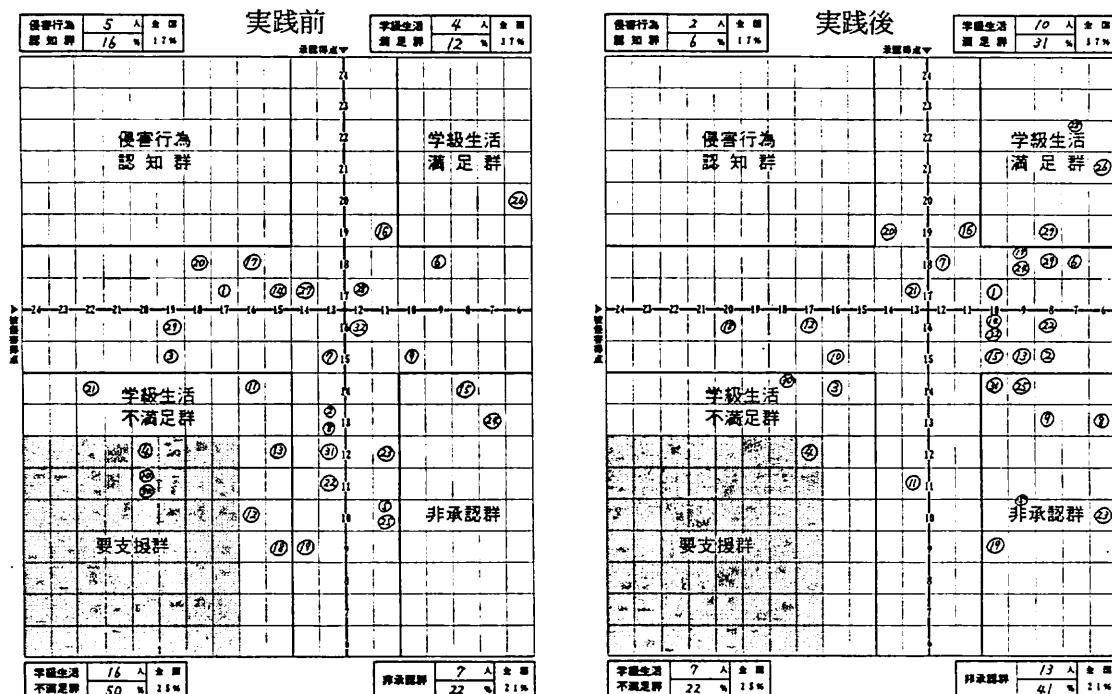
② 児童の変容

「楽しい学級生活を送るためのアンケートQ-U」を構成的グループエンカウンターの実践前後で実施した。(資料4)

実践後の結果は、学級生活不満足群が50%から22%に減り、学級生活満足群が12%から31%に増えた。しかし、まだ非承認群が41%と高くなっている。非承認群の特徴は、目立たない児童、無気力な傾向がある児童、自己表現の仕方を知らない児童である。

したがって、今後も、教師や友達から認められる場面を多く設定する、小さな頑張りでもほめてあげる、その児童の能力ができる役割を通して学級に関わるように配慮するなどの対応をしていきたい。

資料4 楽しい学級生活を送るためのアンケートQ-U



VI 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 資料や文献等により、不登校についての理解を深めることができた。
- (2) 不登校の状況に応じた、援助の仕方の見通しを立てることができた。
- (3) エンカウンターの実践を通して、より良い人間関係をつくるための技法を理解することができた。

2 課題

- (1) 不登校の指導は、自立を目指しての援助指導である。ただ単に、学校に通えれば解決だと考えていたところに、大きな誤りがあったと思う。子ども自身が自分の力で克服できるような援助のあり方をこれからも考えていきたい。
- (2) 年間を通したエンカウンターの取り入れ方や道徳、特別活動、教科や総合的学習と関連させた研究を深めていきたい。

<主な参考文献>

牧昌見・甲斐志郎	『登校拒否児の発見と援助・指導』	才能開発教育研究財団	1991年
国分康孝	『学級担任のための育てるカウンセリング』	図書文化	1998年
国分康孝	『エンカウンターで学級が変わる』	図書文化	1996年
神保信一・君塚斉	『登校拒否指導事例集』	教育出版	1991年